〈基調講演〉

モンゴル研究の過去と将来

吉田　順一

はじめに

2001年夏に、内モンゴルのフフホト市にある内モンゴル師範大学で開催された国際学会に参加しており、内モンゴル大学のトゥブシン教授から以下のような依頼を受けた。

中国で最近刊行が開始された『蒙古学百科全書』（全20巻）に「国際蒙古学巻」というタイトルの一巻がある。世界にはモンゴル学・モンゴル研究を行っている国はいくつもあるが、この「国際蒙古学巻」に、それらの国のモンゴル研究の状況について、それぞれの国の研究者に書いてもらって収録する計画なので、日本におけるモンゴル研究については吉田に書いてほしい。枚数は15万字ないしそれ以上でも可である。

私は、今回のシンポジウムの「発表概要」を書いたときには、依頼された原稿を完成させてその内容を話せば、私に与えられた演題「モンゴル研究の過去と将来」に対する責めをふさぐことができると考えていた。今の貴志俊彦助教授の説明を聞くと、それでは不十分で、北東アジア研究に関連づけて述べることが求められているので、持参した原稿の内容を、その方向に一部改めて話すことにしたい。

『モンゴル秘史』以前のモンゴルと北東アジア

配付された資料に私の研究経歴が紹介されており、その中に、『モンゴル秘史』研究のことが挙げられているが、私は近年遊牧の研究に集中しており、『モンゴル秘史』の研究を離れたような状態になっていた。ところが、早稲田大学に日本学術振興会外国人特別研究員として招いた中国社会科学院「民族学と人類学研究所」のムンフダライ（孟達来）氏と、『モンゴル秘史』に関わる共同研究を始めることになった。それは私が関心をもっている遊牧、狩猟に関する語彙を抜き出して、それらを、ひとつはテュルク系の言語、もうひとつは満洲トゥングース系の言語のそれぞれの語彙と比較するという試みである。結果的に遊牧研究との関係で、『モンゴル秘史』の研究に久しぶりに復帰した次第である。モンゴルの牧畜用語にテュルク系言語の影響が見られることは、以前から言われてきた。では一体、モンゴルの牧畜、狩猟は内陸アジアあるいは北アジアの中にどのように位置づけ

られるのかを精密に検討してみる必要があるということで、ムンフダライ氏と上記の共同研究を行ってきたのである。同氏は言語の専門家であり、テュルク系および満洲トゥングース系の言語との比較を行うにあたり、比較・検討対象となるこれら二つのことばの関連語彙を、できるだけ『モンゴル秘史』の書かれた時代に近いところまで言語学的にさかのぼらせて、当時のモンゴルの対応する語彙と比較をする作業を行った。その結果、モンゴル語がテュルク系の言語とはもちろんのこと、北東アジアを主な使用地域とする満州トゥングース系の言語ともかなり関連することが判明した。満洲トゥングース系の牧畜語彙にはモンゴル語が影響を与えたとみられるものも存在する。この研究は2004年に二人で報告書にまとめて刊行することになっている。

ところで、モンゴル系の集団の出てきた場所に関しては古くから議論があるが、チンギス＝ハーンの出たモンゴル部については、モンゴル高原であるとしても、かなり東北部に近いところ、というより東北部そのものであると言ってよいと思われる。そこは、北東アジアに隣接するとも言えるし、あるいは北東アジアの一部とみることも可能な地域である。このこともあって、モンゴルの人々の経済や文化は、シベリア東部から中国東北にかけての地域の人々のそれらと、かなり近い関係にあると、私は前から考えていた。この考えが、彼らの生業の基本である遊牧について言語学的な観点からも確認できるというのは、興味深いことである。

以上のことから、モンゴル研究は、モンゴルが歴史舞台に登場する前から、北東アジア地域の人々の文化と深い関わりを有していたということを意識して行う必要があると言えよう。「モンゴルから見た北東アジア」あるいは「モンゴル学と北東アジア学との関係」を考えるという、本シンポジウムの趣旨に照らして、このことをまず指摘しておきたい。

新発見モンゴル文書の共同研究

本日の私以外の報告は、文字通り新しい時代に関する内容のもので、それに比べて時代が古く、しかも脇道にそれるが、『モンゴル秘史』という古い時代の文献に関する研究について述べたついでにもう一つだけ、私が最近取り組んでいるモンゴル文書の研究について触れておきたい。このテーマは司会である井上治助教授の本来の専門であり、協力して研究を進めてきたものである。

モンゴル文書については、これまで、ドイツのトルファン探検隊が収集したもの、あるいはロシアのコズロフがハラホトで発見したもの、また江上波夫氏がオロンスムでみつけたもの、さらにモンゴルとソ連の共同調査で発見された「白樺樹皮文書」などが存在する。これらについての研究成果は、順次公になっており、最近、1983年・84年に中国の内蒙古文物考古研究所及びアラシャン盟文物考古站という組織が、ハラホトから約3,000件にも及ぶ文書を発見し、その中に、まだ私たちも正確な数を把握できないでいるが、200件くらいだろうと推測されるモンゴルの文書が含まれている。また1999年に、モンゴル科学ア

カデミー歴史研究所のオチル教授が、モンゴル国の一番西のオブス＝アイマグというところから、小断片まで含めて約150件の白樺樹皮文書を発見している。

以上二種類の文書について、私は、ハラホト文書については内モンゴル大学と、白樺樹皮文書についてはモンゴル科学アカデミー歴史研究所と共同研究の交渉をした。対等な関係で、といっても研究費はこちらが確保して、対等な共同研究を行う体制を作って、私が研究代表者になり、井上助教授が共同研究員になった。そのほかにも共同研究員は何人かおり、相手国の研究員も含まれている。以上はハラホト文書の場合であり、白樺樹皮文書の共同研究は、もっと研究員の数が絞られている。このような共同研究を2001年から行ってきているのである。

ところで、オブス＝アイマグでみつかった白樺樹皮文書については、白樺樹皮文書のそばで紙の文書も同時に発見された。これは、紙同士が付着して、やっかいな状態のものであった。白樺樹皮文書については、日本に持ってきて保存処理も終わらせ、研究の段階に入ったので、引き続き紙文書も日本に持ってきて、同様に保存処理をしようということで、助成金を申請して、もらえることになっていた。そこでモンゴル国側にそのことを伝えたところ、きちんと保存していたはずなのに、最近、紙文書のかたまりが崩壊してしまい、文字通り土と化してしまったということがわかって、愕然とした次第である。

さいわいに、モンゴルとソ連の共同調査隊が白樺樹皮文書をみつけたハルボヒン＝ボルガスで、新たに白樺樹皮文書がみつかり、今年もまた発掘されて合計70枚程度に達した。そこでその研究に切り替えようと決意し、井上助教授を日本側の研究代表者に据え、私は共同研究員として名前を連ね、このような体制でモンゴル側と共同で研究を行うことにし、私が先般モンゴルに行ってオチル教授と話をまとめ、協定文も井上助教授を日本側研究代表者とするという内容に変えたものを締結してきた。

これまでモンゴル・内モンゴルからの出土文書に関しては、主にヨーロッパの研究者が研究をしてきており、日本の研究者がそこに入り込むことは非常に難しかった。しかし近年日本とモンゴル・内モンゴルの研究者交流が、非常に盛んになり、日本の研究状況もモンゴル国や内モンゴルによく理解してもらえるようになり、そこに信頼関係が生まれてきている。もうひとつは、ヨーロッパでこうした文書研究をする人が減ってきている。モンゴル国側も内モンゴル側も、そういう状況をよく認識しており、そのことは、私がモンゴル国や内モンゴルに行った際にも、何人かの研究者に言われた。結局、日本の方に目が向いてきて、こういう共同研究を行う機運が生れてきたということだと考えている。最近の状況から、モンゴル国でも、内モンゴルでも、こういう文書類がまたみつかる可能性は大いにあり、現在私と井上助教授がモンゴル国、内モンゴルと共同で進めている研究が成功すれば、今後新しく発見される文書の研究について、先方は引き続き共同研究に応じるであろう—これは日本のモンゴル研究の将来にとって、非常に重要な問題ではないかと考えている。

日本のモンゴル研究と内モンゴル東部地域

つぎに、今日の私の講演の中心である内モンゴル東部地域とそれに関する記録について話をしたい。19世紀末から1945年までの内モンゴルのさまざまなことがらに関する記録類を一番多く残したのは、日本人であると思われる。それらの記録類は、この時期の内モンゴルの研究に不可欠である。現在、内モンゴルの档案館の資料は、閲覧が非常に困難な状態にあり、たとえばフフホトにある内蒙古档案館は外国人に対して極めて守備が堅い。このような状況から、日本人がかつて書き残した記録類が、今でも非常に重要な資料として価値をもっている。ここで記録類というのは、専門家が専門的な調査研究を行って成果としてまとめた記録だけではなくて、役人、軍人、商人、会社員、旅行者など、あらゆる人たちの書き残した記録類を含めて考えている。

戦前の日本の専門性の高い研究や調査に関して、1970年に大阪大学の山田信夫教授が、『日本に於ける蒙古・中央アジア研究小史』という冊子を刊行し、その後それは、山田氏の『天山のかなたに－ユーラシアと日本人』(1994) に収められた。これは、戦前の日本人の調査・研究を、初めて歴史的に概観したものだと思われる。山田氏によると、日本人は、元寇のときにはじめてモンゴルに接触し、明治維新後まもなく諸外国と交渉をするようになったときにも、元寇の記憶があったので、モンゴルに関心を示すようになったと書いているが、確かにそのとおりであろう。山田氏はさらに、そのモンゴルへの関心が中国史料に基づく元朝の研究、モンゴルの研究へと発展していったと述べている。明治維新後まもなくから現在に至るまで、日本におけるモンゴル研究は、途絶えることなく進められてきた。その研究の過程は、山田氏によると、満洲事変が起こった1931年までを第一期、その後1945年までを第二期として分類される。そして1945年から1955年までは、一応第三期と分類される。第一期はさらにふたつに分けられ、その前半は、1904－05年の日露戦争までであり、その後満洲事変勃発までが第一期の後半として分けられる。第一期の前半にモンゴル研究がはじまった理由として、さきほど述べたように、元寇が挙げられるが、また、北東アジアへのロシアの南下が隣接するモンゴルへの関心を高めたことも挙げられると私は考えている。山田氏は、第一期の後半というのは、日露戦争の結果、日本の満洲における権益が確保され、これが大きな理由となって研究が飛躍的に発展したのだとする。そしてそれまでの文献による研究以外の、さまざまな分野に関して研究が開始されたということを述べている。第二期は、1931－32年以後、研究者がモンゴル高原を訪れて調査研究することが容易になった。もちろんそれ以前にも、かなり行っていたが、第二期になるとさらに容易になった。研究者の数も増加し、研究分野も一層広がり、さまざまな研究が本格的に行われた。また満鉄に加えて、満洲国のような行政当局やその他の研究機関による調査・研究が実施されて、膨大な数量の研究成果が出された。第三期つまり第二次世界大戦後は、第二期に第一線で活躍した研究者が、それまで調査・収集し蓄積した資料を整

理することなどを行った。この時期区分は、今後修正の必要も出てくるかもしれないが、今のところはこれでよいと、私は考えている。

次に、広大なモンゴルのどこに対して日本人がまず手をつけたかという観点から見ると、すでに触れたように、北東アジアに対するロシアの南下が、北東アジアに隣接しているモンゴルへの関心を高めたということであって、具体的には内モンゴル東部から本格的に手をつけた。この点は、北東アジア研究の立場から見てもっと注目されてよいと思われる。今のモンゴル国に対しても、早くから関心はもっていたけれども、そしてなにがしかの成果も挙がっていたけれども、この地域に入ることができたのは1921年までで、それ以前もそこに入るのはなかなか容易ではなかったが、1921年になると、もはやスパイとしてでも入る以外にないような状況になってしまった。そこで、日本人のモンゴル国すなわちモンゴル人民共和国に対する調査研究は、ソ連やモンゴルで出された資料を使うか、あるいはスパイの集めてきた資料を使う以外には方法がない状況となった。

一方、内モンゴルについては、事情が異なり、特にその東部地域においては多種多様な記録が残された。その後、内モンゴルの中西部に対しても日本の政策が実施され、蒙古連合自治政府が樹立され、かなりの記録が残された。しかし最も早くから、最も長い期間、最も多くの記録が残されたのは、内モンゴルの東部地域であったということができる。

私は1970年代の半ばから20数年間、明治維新以後の時期から敗戦まで、あるいはその後の時期までに作成された記録類を調査し、収集して、データベースに登録してきた（作業を開始した最初の頃は雑誌、学会誌といったものに掲載された、純学術的な論文も入れていたが、最近はそれらを登録することはしていないので、それらについては、あまり充実していない）。

ところで、内モンゴル東部というと、満洲とか、満洲国という名前をタイトルに冠した本の中にも、部分的に触れられている。そのどれをデータベースに採り、どれをデータベースに採らないかの境界線の引き方が非常に難しいが、そうしたことをあまり厳密には問わないで、ざっと内モンゴル関係として扱って集め、データベースに登録してきた。近い将来、その数は8,000件を超えるだろうと思われ、これに外務省の外交資料館や防衛庁の防衛研究所の図書室などに収蔵されている文書類を加えるとすれば、さらに多くなる。このように、日本人の記録活動というのは、かなり膨大なものであったということが言えるのである。

内モンゴル東部地域関係記録の利用

当然のこととして、これらの資料をモンゴル、特に内モンゴルの近現代史の色々な研究に用いない手はないが、最近まで、必ずしも十分使われていたとは言えなかった。上述のように、敗戦後に、戦前収集した資料の整理に基づく研究がなされたが、それらは主として、個々の研究者が自ら調査し集めた資料の整理に基づく研究であった。その際に、もち

ろん関連資料も参照されているが、戦前蓄積された資料の総体をよく把握した上で、それらの関連資料を使ったとは必ずしも言えないものが多い。言うまでもなく、記録全体を長い時間をかけて全部明らかにするというのは、非常に困難なことであり、この点を研究者たちの研究上の問題点として指摘するつもりは毛頭ない。ただ私のみるところ、社会経済の分野については、後藤冨男氏の『内陸アジア遊牧民社会の研究』は別格であろう。もともと後藤冨男氏は善隣協会で仕事をし、その後満洲にも移ったから、当時の記録類についてよく知っていて、この本の中で、それらを相当活用できたということが言えるであろう。

研究者が最初に戦前の記録類を調べる場合、文献目録に頼らざるを得ないが、関係の記録も含む文献目録としては、京都大学人文科学研究所が1953年に発刊した『蒙古研究文献目録』がよく知られている。これを基礎に1950年以降の文献を追加した『モンゴル研究文献目録（1900－1972)』が日本モンゴル学会から1973年に発刊された。しかしこれらはすでに指摘されているように、到底十分なものとは言えない。そして今日に至るまで、内容の充実した文献目録は出されていないという状態が続いている。私自身が、将来データベースに登録される件数は8,000件を超えるだろうなどと言いつつ、目録を作っていて出さないのであるから、私にも責任があると言える。実はだいぶ前に中見立夫教授から、目録をアジア・アフリカ言語文化研究所から刊行する援助の用意があるとの申し出を受けたことがあったのである。だが、それでも私は、これを刊行することをためらい、今でもその気持ちをもち続けている。次々に新しい記録類がみつかるので、どこで区切って世に出すべきか、決断しかねるからである。しかしいずれにせよ、文献目録が不十分な状態であることが記録類が十分に利用されてこなかった理由の一つであることは明らかである。

社会経済関係の分野において、こうした記録が十分利用されてこなかったもう一つの大きな理由は、おそらくそれらの資料の価値に対して疑問が抱かれてきたことにある。たしかにそれらの記録類には、調査・研究方法について十分の理解をしないままにまとめられたものも相当ある。また、調査期間が限られていたためか、短期間で調査をして、資料の整理と分析にも時間をかけることができなかったような仕事もある。また調査不足を既存の調査報告の転用でごまかしたのではないかと思われるようなものもある。このようなことは、確かに戦前の記録の中で重要な位置を占める調査報告類に対する批判・疑問の理由となり得る。もちろんそれ以外にも、当時の政治状況から、公正な調査ができたのかという疑問もあり、さまざまな批判がなされてきた。しかし、だからといって、当時の記録類の全てについて評価に値しないということはない。

当のモンゴル人が、日本人の戦前の記録類について、中国側のものと比べて、どちらをより評価する傾向にあるかというと、私の知る限り、概して日本人の書いたものの方である。中国側の記録は、もともと政治性が大変強く、疑ってかからなければいけない点が少なくない。例えば、最近私は、中国の統計資料を使ってみて、それらの資料から、若干の傾向を知ることはできるけれども、そこに書かれた個々の数字は大いに疑ったほうがよい

と痛感している。このように考えているのは、私だけではないだろう。日本人の記録について、戦前のものは価値がなく、戦後のものはよいかというと、簡単にそのようにみることはできない。最近のことを言えば、1990年以降、モンゴル人民共和国の体制が革まって、日本人が久しぶりにずいぶんモンゴル国に行くようになり、また内モンゴルにも近年、かなり行きやすくなって出かけている。ところが、モンゴル国や内モンゴルに行った人が書いた近年の旅行記、あるいは報告書などの記録に、かなりいいかげんなものがある。私は、いつの時代でもこういうものなのだろうと思っている。資料というものは、しょせんそのようなものだと割り切るべきで、十把一絡げに戦前期の資料はだめだとか、あるいは中国の資料はだめだとか、日本の資料はだめだとか言うのは乱暴な断定である。利用する側が自らの力量によって、資料を十分に批判し、その価値を発掘して利用する、これが妥当な考え方であろう。要するに、資料を扱う側の力量の問題が大きいということである。

内モンゴル東部地域と北東アジア

日本の本格的なモンゴル研究がはじまってから、すでに1世紀を優に超えており、多様な研究がされてきたが、その最初の時期において、まず手をつけられたのが、内モンゴル東部の一番東の部分であった。それは、関東都督府やそれ以外の機関が、満洲地域に関心をもつようになったときに、そこに隣接していて、しかも農耕化が進んで、満洲地域と変わらぬ状況になっていた事情もあり、当然のように満洲とともに調査対象として選ばれたのである。周知のように、ハラチン右翼旗を足場に専門の研究者として最初の本格的なモンゴル調査を行った人に、鳥居龍蔵・きみ子夫妻がいるが、この人々も、関東都督府よりやや西寄りの、内モンゴル東部地域を北上して調査を行った。

内モンゴル東部地域の最も東の部分というのは、清朝末期に、「新政」によって続々と漢族に開放されており、あいついで県が設置されて、モンゴル人の行政組織である「旗」から外されて、現在の中国東北、遼寧・吉林・黒龍江の三省の行政範囲に組み込まれつつあった。開放地とされなかったところでも、「新政」が実施される前から漢人農民がどんどん入り込み、ステップが次々に開墾され、家畜を飼う場所が狭められ、遊牧生活が困難になった地域のモンゴル人の中には、牧地への定着性を高めざるを得なくなったり、農耕に従事して半農半牧に移行したり、さらには完全な農耕民となる者が増加した。これらの地域にも県が数多く設けられた。ハラチン地方—日本との関係が最初にできたハラチン右翼旗はその一部である—についていえば、ここは、早くから農業地域と化しており、県がいくつも設けられ、結局は遼寧省に大部分が属することになった。現在東北三省内に、ゴルロスとか、ドゥルブドとか、あるいはモンゴルジン、ハラチンなどのモンゴルの自治県が、かろうじて維持されているが、それらは、内モンゴルとは切り離されており、将来内モンゴルに復帰する可能性は少ないと思われる。日本人が明治期に北東アジア、ロシアへの関心から、北東アジアに隣接するということで手をつけ、本格的に関わった内モンゴ

ル東部地域の東側・東南側の広大な部分が、今や中国東北三省に組み込まれてしまっているのである。

私は、すでに述べたように、近年遊牧の研究を行ってきた。そしてその一環として内モンゴルの遊牧を調査研究してきた。内モンゴル東部の遊牧については、日本人の書き残した調査報告書の中に、資料としてかなり使えるものがある。それらを使ってなお不十分である点は、現地調査を何度か行って研究を進めてきた。そして今回のような報告の機会を与えられて考えてみると、内モンゴル東部地域の遊牧が、定着牧畜を経て、半農半牧に転じて、農耕の比重が高まっていくという過程の先には、農耕地帯に吸収されるという現実が控えていないと言えるのだろうか。そしてその場合、吸収される先というのはどこだろうか、このようなことを意識せざるを得ない。本日の会場には内モンゴル出身の方もおられ、そんなわかりもしない予測をしても、意味がないのではないかと言われそうであるが、私には、中国の東北三省と言われている地域が、現在の内モンゴル東部の農耕地帯を引き受ける、さらには半農半牧地帯までも引き受ける、あるいはそれらを吸収する事態になるのではないかという気がしている。現実にそうなるかどうかわからないが、そういう可能性があると思われるのである。

現在、東北三省に組み込まれて落ち着いている地域に接し、内モンゴルの東部地域の構成部分となっている興安盟、ジリム盟（今の通遼市）、ジョーオダ盟（今の赤峰市）も、中国のいわゆる文化大革命の時期に、内モンゴル自治区から外されて、東北三省に含められていたことがある。現在フルンボイル市となったが、最近までフルンボイル盟と言われていたところは、当時黒龍江省に組み込まれていた。実はアラシャン盟も外されていた。アラシャン盟が外された事情については別個の理由を考えなければいけないのであろうが、この東北地域の三つの盟、それからフルンボイル盟、これらは東北三省に含められてしまい、あの時期の地図をみると、内モンゴル自治区は現在とは、驚くほどかけ離れた形状で、非常に小さく異様な形をしている。文化大革命の終結後に、これらの地域は内モンゴル自治区に戻されたけれども、この顚末は、この地域と中国東北三省との関係について、一層関心を深めさせるものである。

中国東北というと、こちらの島根県立大学の場合、北東アジア地域研究センターがあり、大学院北東アジア研究科がある。では、北東アジアと東北アジアの関係はどうなのかという問題が生じ、中見教授の本日の報告ともかかわるが、中国東北地区は北東アジアと称する地域の一部であると、島根県立大学では考えている。そうであるとすれば、北東アジア研究のひとつの課題が、このように東北三省との関連が密であり、そこに吸収されつつあるようにみられる現象が存在する内モンゴル東部に対しても設定されてしかるべきである。このことが、どうしても研究課題として浮かび上がってくるのではないか。

実は、内モンゴル東部地域に暮らすモンゴル人たちに生じた変化は、生業の点だけではない。言葉について見ると、独特の漢語混じりのホルチン方言と称されるモンゴル語を話

しており、よく言われることであるが、文法はモンゴル語だけれども、使われている単語は漢語の方が多い—そういう奇妙なモンゴル語だと皮肉られるほどである。ものの考え方も、隣接するフルンボイル盟やシリンゴル盟のような牧畜地帯のモンゴル族と、かなり異なってきているようである。このジリム盟のホルチンの人たちも、好んで農耕の民となったわけではないのに、今やその多くが遊牧を遅れたものと考えているようであり、牧民に対する眼も、牧民が牧民をみるのとは違う眼差しであると指摘する人もいる。端的に言えば、考え方が漢人に近い、漢人に近づいているとみる人もいる。

満洲国建国のさいに、満洲国の対モンゴル政策の策定に中心的な役割を果たしたと思われる菊竹實蔵という人がいるが、そのように非常に重要な活動をした人物が、つぎのように書いている。ハラチンのモンゴル人は漢族と激しい摩擦の内に育ったために、他の地区のモンゴル族とは相容れない一種の性格をもっていて、漢族のモンゴル人に対する見方に反感を抱きつつも、その考えの影響を強く受けているため、他の地区のモンゴル族に対するときには、彼らを搾取の対象とみて、かつ自らは征服統治者たるの想念を抱いているようである。そしてホルチン出身者にも、ややこれに近いところがある。興安局において、興安省において、ハラチンの人を行政官として使うのは危険だ、さらにダゴール人も、ややハラチンのモンゴル人に近いとまで言っている（菊竹實蔵『経蒙談義』、1941年）。ホルチンは、それほどでもなかったけれども、以来60余年、農耕化が進んでおり、言ってみればハラチン化したモンゴル人としてのホルチンの人が増えている可能性もあるのではないかということも考えられるのである。

このように、この地域のモンゴル人の生業のあり方が大きく変わり、それに伴い言葉・考え方なども変わってきた。この地域のモンゴル人の経済、社会、文化全般が変わってきたということである。この変容は、この地域のモンゴル人の生き残りの努力のひとつの結果であるという見方もあるが、「漢化」の過程とみることも、また一説となり得よう。この意味からも、私には、上述のように、内モンゴル東部地域が東北三省に吸収されつつあるとの考え方は、軽視されるべきではないと思われる。もちろん、モンゴル人の民族としての誇りが強くあり、自らの自立性を維持し、モンゴルの伝統的な文化を守り続けようという人々はたくさんいる。しかし長期的にみると、この地域が中国東北三省すなわち遼寧省、吉林省、黒龍江省に取り込まれる傾向と現象の存在は、否定しきれないのではないかという考えを拭いきれないのである。

この変容の意味・内容を正しく把握し、理解し、位置づけることは、モンゴル史において非常に重要であると考えられる。というのは、ここには、モンゴル人の人口が非常に集中しており、内モンゴル自治区の人口の３分の２を占めているからである。その人口は、現在のモンゴル国の人口より、ずっと多い。そういったモンゴル人の集団が、モンゴル高原の一角においてこのように変化してきたということは、モンゴル史、とりわけその近現代史を考察する上で、無視できない条件である。

おわりに

最近、この内モンゴル東部地域の研究が非常に活発になってきており、特に若い研究者がこの地域の研究を本格的に行っている。本日会場に来ているブレンサイン日本学術振興会外国人特別研究員もその一人で、私はブレンサイン君が修士課程に入ったときに、私は遊牧の研究をするからブレンサイン君は農耕の方をやるようにと言った経緯がある。その通り彼は農耕の研究で学位も無事取得した。この分野の研究者には広川氏もいるし、その他の人々もいる。今後この地域の研究がいよいよ活発になっていくことにより、本日私が取り上げた問題についても、研究を深めてくれるのではないかと期待している。

早稲田大学が昨年度から始めた21世紀COEのプログラムのひとつに、「アジア地域文化エンハンシング研究センター」というのがあり、私も参加し、本題としては遊牧のことをテーマとしているが、本日最後に取り上げた農耕村落社会の問題も研究しなければいけない状況になってきた。本日のシンポジウムのあと、11月1日に早稲田大学で国際シンポジウムを予定している。テーマは「近現代における内モンゴルの東部地域の変容」である。報告者の一人目は南開大学の杜家驥教授である。この方に「清朝期の満蒙婚姻関係が内モンゴル東部地域の文化に与えた影響」という報告をしてもらい、それに対するコメントは筑波大学の楠木賢道教授にお願いする。二番目に内モンゴル大学のバイルダクチ教授の「グンサンノルブ改革の社会・歴史的背景と影響」という報告。それに対するコメントは先ほどのブレンサイン君。三番目が中央民族大学のヒシグトクトフ教授で、「インジャンナシの『ニゲン・ダブハル・アサル』と『オラナ・オヒラフ・ティンヒム』における漢文化の影響」という報告をしてもらい、コメントは東北大学の岡洋樹助教授にお願いする。四番目が内モンゴル社会科学院のションホル研究員で「農業文化とノン・ホルチン方言の成立」という報告をしてもらい、それに対するコメントは昭和女子大学のフフバートル氏にお願いするといった予定であり、本日私が最後の方で話したことについて研究を深める主旨で設定したシンポジウムである。

このように日本におけるモンゴル研究に新しい流れが訪れつつあることを紹介して本日の報告の締めくくりとする。

キーワード　モンゴル研究　北東アジア　内モンゴル東部
日本におけるモンゴル研究史　モンゴル近現代史　満洲国

(Jun'ichi YOSHIDA)